唐代伝奇「杜子春伝」に関する一考察(3)

――いわゆる「試し」の場面の二つの語彙をめぐって――

増　子　和　男

前　言

「杜子春伝」に関する筆者の論考も、三編目となった。本作品の語彙的研究を通じて実感されたのは、唐代小説の語彙研究が、唐詩におけるほど、必ずしも十分試みられてはいないという事実である。先行の論文ばかりではなく、日中の訳注書を比較対照しても、その実感は深まりこそすれ、薄まることはない。読者が知りたい語句ほど、触れられていなかったり、説明が辞書的域内に止っていることが少なくないからである――もっとも、これは詩の訳注書にも見られる傾向ではあるが[1]――。

一つの作品の来源を探り、或いはその主題を模索することが、作品研究の重要な営みであることは論を俟たない。しかし、そのためにも、作品中に見える一つの語彙に対しても検討を加え、さらに同時代の人々が、その語彙にどのような思いを共有していたのかを、今少しく考察しておく必要があるのではあるまいか。

一

放蕩の限りを尽くし、親類縁者にも見放された主人公・杜子春は、不思議な老人に三度に渉って、金銭的援助を受ける。このうち、二度までは放蕩により、使い果たしてしまうが、三度目の援助によって、浮世の義理を済ませ、老人と共に華山雲台峰に登る。そこで子春に課せられたのが、仙薬完成までの沈黙の業であった。これが、いわゆる「試し」の場面である[2]。

この場面は、大きく分けて、次のようになろう。

(1) 大将軍、親衛と共に登場し、子春の姓名と、何事を為すかを問うが、子春の応じないのを見て去る。続いて、猛虎をはじめとする恐ろしい生き物が登場して、子春を責めさいなむが、効果が無いと見るや退散。大雨雷鳴が起こり、水は子春の坐下に及ぶが、彼は端坐して顧みない。

(2) 大将軍、牛頭獄卒・奇貌の鬼神を率いて再登場。威嚇しても沈黙を守る子春。子春の妻、引き出されて責め苦を受け、ついに剉碓[3]によって、脚より寸寸に剉られるが、子春はこれを顧みない。

(3) 子春、大将軍の命令により斬殺され、魂魄は閻羅王のもとへ引き出され、地獄へ落とされることとなる。彼は地獄の責め苦

を備に受けるが、うめき声一つ上げない。

(4) 地獄での責め苦を受け終わった子春は女として再生。結婚し、一児をもうけるが、子春が口をきかぬことに腹を立てた夫により、愛児が殺されるのを目のあたりにして、思わず声を発してしまう。

「試し」の場面に見出される語彙が、多く仏教用語に来源を持つものであることは、この場面に散見する、

牛頭獄卒、閻羅王、獄(地獄)、鎔銅・鉄杖・碓擣・磑磨・火坑・鑊湯[4]・刀山・剣樹

などの意味を辞書等で調べれば、直ちに明らかにされよう。さらに、唐、釈道世『法苑珠琳』巻十一「地獄部」の、

夫論、地獄幽酸特為痛切。刀林聳日、剣嶺参天、沸鑊騰波、炎炉起焰、鉄城昼掩、銅柱夜燃(中略)牛頭悪眼、獄卒凶牙、長釵拄肋、肝心碓擣。猛火逼身肌膚浄尽、或復舂頭擣脚、煮魄烹魂。到胆抽腸、屠膾肉…(「述意部」第一)[5]

という記述と対照したとき、右の語彙が仏教に来源することは、より一層明らかとなる。[6]

先行の論文や訳注書では、こうした点を拠所として、種々論を進め、解説をしているわけであるが、この場面のうち、

① その意味が全く検討されていない語彙。

② 語の意味は述べられているが、その来源や、当時の人々に共通する、その語に対するイメージといったものが検討されていない語彙。

が、各一例見出される。それは、わずか二つの語彙ではあっても、これらを検討することによって、「杜子春伝」を読み解く上での、何らかの手がかりとなるものと思われる。

二

まず、右に示したうちの②に相当する「剉碓」という語彙を検討したい。

この語が見出されるのは、「試し」の場面の(2)であった。

いかなる威嚇にも動ぜず、沈黙を守る子春に業を煮やした大将軍は、彼の妻を捕らえて来る。妻は子春の眼前で鞭打たれ、射られ、切られ、煮られ、焼かれる。苦しみに耐えきれなくなって、一言でも発して欲しいと哀訴する妻の言葉にも子春は顧みようともしない。

将軍は且つ日はく、吾汝の妻を毒すること能はざらんや、と。剉碓を取り、脚より寸寸に之を剉らしむ。妻の叫哭愈急なるも、竟に之を顧みず。

この「剉碓」が何であるかについては、

(A) 刀とする説：前野直彬『六朝・唐・宋小説選』（中国古典文学全集(6)、平凡社、一九六四年）同『唐代伝奇集』2（東洋文庫(16)、平凡社、一九六四年）、同『六朝・唐・宋小説選』（中国古典文学大系(24)、平凡社、一九六八年）

(B) 鉈（鉈刀。骨、角、鋼鉄などの出っぱったところをとり去る道具）と碓（穀物をつく用具）とする説：姜雲・宋平校注『玄怪録・続玄怪録』（上海古籍出版社、一九八五年）、今村与志雄『唐宋伝奇集』（下）（岩波文庫、一九八八年）

(C) 剉（藁などを短かくする道具）と碓（石臼）とする説：塩谷温『晋唐小説』（国訳漢文大成・文学部(12)、国民文庫刊行会、一九二〇年）、塩谷温注・川端康成訳『唐代小説』（支那文学大観(8)、同刊行会、一九二六年）[7]

(D) 押切りとする説：内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』（新釈漢文大系(44)、明治書院、一九七一年）、高橋稔・西岡晴彦『六朝・唐小説集』（中国の古典(32)、学習研究社、一九八二年）

という諸説がある。このうち、(A)は意訳に過ぎ、語釈たり得ないが、(B)(C)は剉と碓とを分け、(D)は剉碓を一つの語とする。本文に言う「寸寸に剉る」には、やはり、(D)説に従うべきであろう。[8]

＊　＊

この場面は、「杜子春伝」の「試し」の幻影中に散見する残虐な場面――いわゆる「異常な興味を呼ぶ面白さ」[9]を示す一典型と見為すこともできよう。本作品以外の類話には、この場面が見出されない事から、明らかに作者が読者を意識して挿入したと考えられるからである。では、剉碓で人を切り刻むというのは、作者の創作と考えて良いのか、或いは、この場面を挿入したのは、単に読者の好奇心を呼ぶためだけであったのかが問題となる。

史上、剉碓を刑具として用いた例は、南北朝と称せられる時期の、北朝側の記録に見出される。

○（汝南王）悦為大剉碓置於州門、盗者便欲斬其手（『北史』魏書巻二二「孝文六王、汝南王悦伝」）

○帝（北斉・文宣帝）遂以功業自矜、恣行酷暴、昏狂酗醟、任情喜怒。為大鑊、長鋸、剉碓之属、並陳於庭、意有不快、則手自屠裂、或命左右臠噉、以逞其意（『隋書』巻二五「刑法志」）[10]

右の記録のうち、北斉の文宣帝（五五〇―五五九在位）は、軍事にかけては天才的であったが、殺人に対して異常な嗜好を有した人物であり、その嗜好を満たすために、常に囚人が用意されていたと伝えられる。[11]

唐代に在っては、刑罰は、笞・杖・徒・流・死の五刑が定着し、死刑の方法も、絞（絞首刑）と斬とに限られたと記録には見える。[12]従って、剉碓により人を切り刻むという着想は、作者自らが、その身辺で直接見聞したものによるのではなく、右のような記録ないしは、そうした伝承に基づいたものと考えるべきであろう。とりわけ、意識されたのは、北斉の文宣帝の行跡ではあるまいか。その理由の第一としては、北斉と唐とは、時代的にさほど遠く隔っていないこと。従って、暴虐の君主であった文宣帝の行跡は、人々の間に生々

しく語り伝えられていたものと推定されるからである。[13] 第二に、もしそうでなくとも、文宣帝の右のような記録が、『隋書』に載っていることは注目すべきことと言って良い。唐代に小説を享受し得る階層の人々にとって、前代の歴史を記録した『隋書』は、恐らく何らかの形で目にしていたであろう。従って、そうした前提があれば、「杜子春伝」の剉碓云々の記述に接しても、共通のイメージを結ぶのに、さほどの困難を伴わなかったであろうと考えられるからである。

＊　＊

さらに、次の記述は、「杜子春伝」より後代に成ったものではあるが、剉碓の語の来源と、同時代人に共通したイメージを考える上で、もう一つの可能性を示すものと思われる。

廡下各列門戸、或榜云鑊湯地獄、或榜云剉碓地獄（南宋、洪邁『夷堅志』乙志巻五「張女対冥事」）

これは、南宋の紹興己未（九年〔一一三九〕）正月七日に、張淵道という人の二女が、死から蘇り、冥界の有様を語った中の一節である。この話のパターンそのものは、六朝以来の入冥譚と呼ばれる一群の説話のパターンを踏まえたものと言えるが、就中「剉碓地獄」の語が注目される。

「剉碓地獄」の名は、先に引いた『法苑珠琳』巻十一「地獄部」をはじめとする仏教系の資料には見出すことが出来ない。

この語が見出されるのは、道教系の地獄説を示した『太極真人二十四門戒経』である。[14] これは、人が犯してはならない二十四の戒とそれを犯した場合に落ちる地獄を示したものであるが、その第五番目に次のように述べる。

不得違経慢道、欺誘他人、敗壊霊壇、侵損常住、隠没功得、践踏福地。犯者過去受剉碓剉身地獄罪。

もちろん、「杜子春伝」には、子春の妻が右のいずれかの罪を犯したという記述はなく、彼女が剉碓によって足先から寸々に剉られるに至ったのは、むしろ夫である子春の側に理由があってのことであった。

しかし、「剉碓」の語に、先に示した歴史記述、とりわけ北斉の文宣帝の行跡に対するイメージに、さらに道教系の地獄説である「剉碓地獄」のイメージが重なる可能性があることは注目されて良いであろう。一つには、これが、唐代の人々の仏教と道教の混淆を示す好箇の例となり得ること。[15] そして「杜子春伝」を読み解く上で、より重要なことは、「剉碓」に地獄のイメージがあることである。何となれば、子春の眼前で妻を責めさいなんでいる者たちこそ、地獄の使者であるからにほかならない。地獄からの使者の用いる刑具は、地獄そのものをイメージさせるものであってこそ、ふさわしい。

＊　＊

以上のように、子春の妻の惨殺場面で用いられた「剉碓」は、作者のイマジネーションによる産物というよりも、この語にこめられた、いわばダブルイメージ――①記録に示された刑具、②剉碓地

獄――を巧みに利用したものと見ることができる。その語を用いた目的は、多分に読者の興味をひくことにあったことは否定できないが、右のようなイメージを共有し得る読者があってこそ、より効果をおさめることが可能であったと言えよう。

三

次に、従来その意味が全く検討されていない「大将軍」という語彙を検討したい。

この語は、先に示した「試し」の場面の(1)(2)(3)に見えるものであるが、筆者が見ることのできた、日中の論文や訳注書では、全て単に「大将軍」(将軍)とのみ示されて、いかなる意味を持つ語であるかが言及されていないものである。[16]

「大将軍」の特徴が最も詳しく述べられているのは、場面(1)の冒頭である。

道士適去すれば、旌旗・戈甲、千乗万騎、徧く崖谷に満ち、呵叱の声、天地を震動す。一人の大将軍と称する有り。身長丈余、人馬皆金甲を着け、光芒人を射る。

以下、場面を追って「大将軍」の特徴を整理すると次のようになろう。

① 身長丈余(唐代の一丈は、約三、一メートル)。

② 金甲すなわち金のよろいを身につけている。

③ 多数の配下(牛頭の獄卒・奇貌の鬼神)を率いている(場面(2))。

④ 閻羅王すなわち閻魔大王に仕えていると思われる(場面(3))。

身長丈余の冥界の大将軍――これだけで今日の読者にも茫洋としたイメージがわかないこともないが、唐人たちは、もっと明確な共通のイメージを持っていたのではあるまいか。

この問題を解く鍵は、まず①に見出されよう。

北斉の世(五五〇―五七七)、崔季舒の妻が昼寝中、次のような夢を見る。

又其妻曾昼寝、見一神人、身長丈余、徧体黒毛。前来逼己。巫曰、此是五道将軍、入宅者不祥也(「崔季舒」〔『太平広記』巻三六一所収、出『北史』〕)。

果して巫の予言通り、崔季舒は罪を得て斬殺されることとなる、というのがこの話の筋である。

この五道将軍は、五道大神、五道神と称され、六朝から唐代にかけて閻羅王に次ぐ重要な冥官と考えられていた神である。[17]

五道将軍(大神)についての詳細な論考としては、小田義久「五道大神攷」がある。[18]今、これを参考にして、五道将軍についての大要をまとめると次のようになる。

① 五道すなわち、地獄・餓鬼・畜生・人・天の頭(冥界の出入口)に在って、武装してここを守護する神である。(『普曜経』)。

② 八王日（立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至）に、人々の善悪を調べて記録し、その記録は最終的には閻羅王のもとに達し、最も罪の重いものは身を失って死し、再び生きかえることはできない（『浄土三昧経』）。

③ 神としての序列は、時代・地域により異なるが、閻羅王の下位に位置づけられているという点では共通している。

④ この神は、中国の民族宗教に埋没しているが、その名が幾つかの疑経[19]に見出されることから、仏教に源流を持ち、それに道教の影響が加わったものと考えられる。[20]

ここに示された五道大神の特徴および先に引いた「崔季舒」に見える五道将軍の特徴とを、「杜子春伝」の大将軍の特徴と対照させると、「杜子春伝」に言う大将軍が、この五道将軍（大神）である可能性が極めて高いと言うことができよう。

＊　＊

「杜子春伝」の類話と目される作品では、この大将軍にあたる役廻りを与えられているのは、

① 昔の傭主（「列士池」）
② 黄衫の人（「蕭洞玄」）
③ 王のような人（「顧玄績」）

である。このうち、②は、六朝以来の入冥譚に多く見出されるものであり、[21]③は閻羅王、平等王などを連想させるものである。が、②③は共に、冥界からの使者という点で「杜子春伝」の大将軍とほぼ同じ性格を与えられたものとみることができる。

それでは何故、「杜子春伝」だけ大将軍なのであろうか。しかも、②の黄衫の人が従えているのは二人の手力（従僕）、③の王が従えているのは数人の鉄騎兵であるのに対し、大将軍は、千乗万騎を従え、人馬共に金甲を着けて登場する。この、いわば芝居がかった登場の仕方の材源は単に民間信仰によるのか、作者の純然たる創作であるのか、それとも他に作者と当時の読者が共通のイメージを結び易い、他の材源が存在するのかが問題として残る。

＊　＊

唐代小説に、当時流行していた俗講、そしてその種本である変文の影響が見られるとする指摘は、劉開栄『唐代小説研究』[22]以来、少なからぬ人々の説くところである。「杜子春伝」についても、近藤春雄『唐代小説の研究』[23]に、地獄の苦が描かれている所は、目連が阿鼻地獄に落ちた亡母を探しに行った「目連変」の影響があるとして次のように述べる。

> しかも杜子春伝にみえる刀山・剣樹・鑊湯・鎔銅・碓搗・牛頭の獄卒の類は、みなそれに見えているが、しかも杜子春伝のそれをえがくにただそれらを羅列するだけに終わらせているのは、恐らく当時、俗講を通してそのことが余りにも知れわたっていたからのことと思われる。（第三節「唐代小説と詩」）

右の指摘は、「杜子春伝」に見える大将軍とは何であるかを直接

説き明かしたものではないが、その由来を考える手がかりを示したものと言える。

今、試みに、王重民ほか編『敦煌変文集』[24]を見ると、五道将軍の名が見えるものに、「韓禽虎話本」（同書巻二）、「破魔変文」（巻四）、「大目連冥間救母変文并図一巻并序」（巻六）の三種がある。これらの作品に見える五道将軍は、「杜子春伝」の大将軍の特徴、すなわち、①身長丈余、②金甲を身に着けている、③多数の配下を率いている、④閻羅王に仕えている、という特徴のいずれかを備えている。とりわけ、「大目連冥間救母変文」の次の一節は、先に引いた「杜子春伝」の大将軍の登場の一節と深い関連を有するものと思われる。

五道将軍性令悪、金甲明晶剣光交錯、左右百万余人、総是接飛手脚。叫諏（叫喊）似雷驚震動、怒目得電光輝鶴、或有擘腹開心、或有面皮生剝（五道将軍はすさまじき方、金の鎧はきらきら、剣の光はぎらぎら、部下は百万余人、すべて精鋭の手下ども。雷鳴の轟くが如き喊（おめ）き声、電光のはためくが如き眼光、ある者は腹を裂き胸開き、ある者は面の皮をひっぺがす）[25]。

唐代、広い階層の人々が、いかに俗講を愛好し、変文に親しんでいたかは、張祜が白居易の「長恨歌」を批評して、

上窮碧落下黄泉、両処茫茫都不見。此豈不是目連訪母耶。

と述べたという、あまりに有名な挿話[26]や、段成式『酉陽雑俎』[27]や張彦遠『歴代名画記』[28]などに俗講の名手であった文溆（ぶんじょ）（淑）の名が見えることなどから知ることができる。

とすれば、「杜子春伝」の作者はもちろん、当時の読者にとって、五道将軍（大神）は民間宗教の信仰の対象としてだけではなく、俗講に登場する、多分に派手なキャラクターとして親しまれていたものと考えられよう。だからこそ、作者は冥界の使者として、この五道将軍を選んだのであろうし、また、その登場の仕方や特徴から、わざわざその名を述べなくとも、当時の読者にわかるという観点によって、単に「大将軍」としたものと思われる。

＊　＊

以上のことから、「杜子春伝」に見える大将軍とは、当時民間宗教の信仰の対象であった、冥界の神の五道将軍（大神）であり、その登場の仕方等は、当時流行していた変文を踏まえたものと考えられる。それを五道将軍としなかったのは、作者と当時の読者との間にその名を言わずとも、共通のイメージを結ぶ素地があったためにほかなるまい。

それがいつしか忘れ去られてしまったのは、一つには、俗講の急速な衰退[29]、そして何よりも、五道将軍の名が消え去り、他に転化してしまったことによるのであろう[30]。

結　語

以上、「杜子春伝」に見えた、「剉碓」と「大将軍」という二つの語彙について検討した。そのことを通じて、これらの語彙が共に作

者の純然たる創作ではなく、今まで検討してきた語彙と同様、何らかの来源を持ち――この場合、史実や民間信仰や俗講――それから来る或る種のイメージを作者と同時代の読者とが共有していた可能性が高いことが推定された。

本文のあらすじだけを追って見て行く限りは、「剉碓」が押切りであれ、押切りと石臼であれ、どちらでも良く、「大将軍」も冥界の使者であろうと推定がつけばそれで良い。あるいはまた、唐代小説は、所詮文字通り「小説」であるので、荒唐無稽・奇想天外なストーリー展開にのみ注目すればそれで良く、こうした語彙の穿鑿は必ずしも意味があるとは言えないとする考えも成立し得よう。

筆者も、基本的には本作品の一字一句悉くから、何らかの寓意を導き出そうとのみする考え方には、全面的には賛同しかねる者の一人である。しかし、本作品をも含めた唐代小説の作者と当時の読者たちが――たとえ、それが名もない一介の士人であったとしても――同時に、唐詩という絢爛にして陰翳に富んだ文学形態の担い手であったことを閑却することは、かえってその読み方を誤るのではあるまいか。

やはり、作者が一定の水準にある読者を想定して作品を世に出す以上は、両者の間に共通のイメージを結び易い――しかもそこからさまざまな連想が生じ得る――語彙を意識的に選択していたと考えてしかるべきであろう。その語が、当時においてどのようにイメージされていたかを復元しようと試みることによって、はじめて作品に本来持たされていたさまざまなふくらみに気付かされ、当時の人々の生の息吹きに接することも、可能ともなろう。そうすることによって、今日我々が一読しただけでは、「無表情」[31]としか捉えられなかった作者の表情も、或いはほの見えて来さえするかも知れないのである。

〔注〕

(1) 松浦友久編『校注　唐詩解釈辞典』(大修館書店、一九八七年)及び、近刊の同書の続編の執筆者の一人として、筆者が少なからぬ訳注書を目にした実感である。

(2) この場面は、先行のいくつかの論文が指摘するように、※

① 「列士池」(唐、玄奘・弁機撰『大唐西域記』巻七「婆羅痆斯(バラナシ)国(Varanasi)」所収)

② 「蕭洞玄」(『太平広記』巻四四「神仙」四四所収、唐、薛漁思『河東記』による)

③ 「顧玄績」(唐、段成式『酉陽雑俎』続集五「貶誤」所収)

などの類話においても見出されるものであり、これが、右の作品と「杜子春伝」とが、同じ根を持つと推定される重要な論拠ともなっている。とりわけ、②は構成上、「杜子春伝」と近似のものと言い得る。

※内山知也「杜子春伝に関する二、三の考察」(『中国文化研究会会報』四―一、東京教育大学中国文化研究会、一九五四年)、松本幸男「列士池(救命池)説話の検討」(『立命館文学』二七五号、立命館大学、一九六六年)、王夢鴎「玄怪録及其後継作

品弁略」(上)(同『唐人小説研究』四所収、芸文印書館、一九七九年)など。ちなみに鄭振鐸は、「杜子春伝」の類話として、「韋自東」(『太平広記』巻三五六)やインドの『魔鬼的二十五故事』(Vikram and the Vampire ―― 邦訳『屍鬼二十五話』)を挙げている(同『挿図本 中国文学史』第二十九章「伝奇文興起」、人民文学出版社、一九五七年)。が、構成上、類話とするには問題が存する。詳しくは、右記の松本、王両氏の論考参照。

(3) 馬草を切る押切りや、剉(押切り)と碓(石臼)など諸説がある。詳しくは後述する。

(4) 鎔銅は溶かした銅。碓臼は、踏みうす。磑磨は、石製のひきうすでひくこと。火坑は火の穴、すなわち焦熱地獄を示す。鑊は、釜。

(5) テキストは、『大正新脩大蔵経』二一二二。なお、傍点は増子。以下、ことわりのない場合は同じ。

(6) もっとも、これらは仏典を直接ふまえて、作者が書いたものではないと考えられている。詳しくは後述する。

(7) ちなみに、本書の刊行を、近藤春男「日本漢文学大辞典」(明治書院、一九八五年)では、昭和十五年、支那文学大観刊行会刊とし、内山知也『隋唐小説研究』(木耳社、一九七六年)では、昭和五年、北隆堂刊とする。筆者の調査では、一九二六年すなわち大正十五年、支那文学大観刊行会刊がオリジナル。前者は未見ではあるが、恐らく誤り乃至は後印本、後者は改装本である。

(8) この点については、次の考証によって、より明らかとなろう。

(9) 木全徳雄「『杜子春伝』の仏教・道教的背景」(『加賀博士退官記念 中国文史哲学論集』、北海道教育大学、一九七九年)。

(10) 酗酲(くえい)とは、酒に酔って狂うこと。臠噉(れんたん)とは、切り身にして食すること。

(11) 宮崎市定『大唐帝国』(世界の歴史(7)、河出書房新社、一九八九年)。

(12) 唐、長孫無忌『故唐律疏議』巻一「名例」。

(13) 本作品が、北斉を併合した北周から隋代に時代を設定していることも、この点を考える何らかの手がかりになるのではないだろうか。

(14) 『正統道蔵』洞真部戒律類所収。

(15) これは、恐らく作者自身も、また当時の読者も、必ずしも明確には意識していなかったであろう。敦煌文献においても、仏教の諸菩薩の名と共に、道教の冥官が並記されており、このことからも、唐人の仏教・道教の混淆が日常的であったとの指摘がある(金岡照光「敦煌文献にみられる諸神諸菩薩信仰の一様相 ―― 題記・追善文・題文等を中心として ――」(『吉岡義豊博士還暦記念 道教研究論集 ―― 道教の思想と文化 ――』所収、国書刊行会、一九七七年)。

(16) 先に「剉碓」の語の考証で示した訳注書のほかに、筆者が主として参照した中国の訳注書は次の通り。①程毅中点校『玄怪録・続玄怪録』(古小説叢刊、中華書局、一九八二年)②蘇味道選訳『玄怪録・続玄怪録』(中国歴代筆記小説選訳叢書、浙

江古籍出版社、一九八九年）③陸昕主編『白話太平広記』（北京燕山出版社、一九九四）。また、筆記小説のいわばダイジェスト版である、南宋、曾慥『類説』巻十一「病在膏肓」や、「杜子春伝」を翻案した明、憑夢竜『醒世恒言』巻三一「杜子春三入長安」なども参照したが、前記訳注書と同様、「大将軍」「将軍」とだけ記述されていた。

(17) 沢田瑞穂『地獄変』（法蔵館、一九六八年）。同書は、本稿を書く上で、何よりの道標となった。ここに記して謝意を表したい。

(18) 『東方宗教』四八（日本道教学会、一九七六年）。

(19) 偽経ではないかと疑われている経典。制作地は西域、南海にわたるが、中国では中国で制作された経を指す（中村元『仏教語大辞典』〔縮刷版〕参照、東京書籍、一九八一年）。

(20) 『地獄変』（本稿注(17)）では、『釈門正統』巻四を拠所として、「五道将軍とは、古く江浙地方に行われた淫祀の一種であったのが、集合せられて冥府の神にまぎれこんだのであろうか。」とされている。

(21) 閻羅王の原型である夜摩（Yama）は、インドの古代叙事詩「マハーバーラタ（Mahabharata）では、血色の上衣を着けているとし、また、ある場合には赤衣を身に着けているとする（山辺習学『地獄の話』、講談社学術文庫、一九八一年。原著は『仏教に於ける地獄の新研究』、春秋社、一九三二年）。

(22) 下篇「『俗文』小説」において、「遊仙窟」と変文の関係に言及している（商務印書館、一九四七年）。

(23) 笠間書院、一九七八年。

(24) 人民文学出版社、一九五七年第一版、一九八四年第二版。なお、台湾の世界書局版『敦煌変文七十八種』は、『敦煌変文集』のリプリント版である。

(25) 日本語訳は、入矢義高「変文」（『仏教文学集』所収、中国古典文学大系(60)、平凡社、一九七五年）によった。また、この一節のうち、「或有擘腹開心」という表現は「杜子春伝」に、大将軍の配下が子春に姓名を言えと迫る場面で、「不肯言、即当心取叉置之鑊湯中」とする表現に重なる。

(26) 孟棨『本事詩』情感第七。同じ挿話は、五代、王定保『唐摭言』巻十三「矛盾」にも収載されている。

(27) 続集巻五「寺塔記（上）」長安平康坊菩提寺の条。

(28) 巻三「記菩提寺画」。

(29) 北宋の真宗（在位九九七―一〇二二）の俗講禁止が、その主な要因であろう。

(30) 『地獄変』（本稿の注(17)）を参照。後の民間宗教では、五道将軍の名は消え、五道神（大神）の名が中心となったことも、その要因と考えられる。

(31) 内山知也「杜子春伝に関する二、三の考察」（本稿注(2)）では、作品の内容を読んでもその作者のイメージが容易に浮かびあがって来ないとし、同「杜子春伝の無表情について」では、作品自体が無表情であるとする（『中国文化研究会会報』二―二、東京教育大学中国文化研究会、一九五一年）。